日本史

日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2月7日	Ⅰ	古代の道	やや難
	Ⅱ	近世における西洋学術の受容と蘭学	標準
	Ⅲ	近現代の通貨体制	標準
2月8日	Ⅰ	古代・中世における文化の担い手と受け手	標準
	Ⅱ	近世の大坂	標準
	Ⅲ	大日本帝国憲法・日本国憲法と電子データ	標準
2月9日	Ⅰ	馬と日本史との関わり	標準
	Ⅱ	江戸～明治初期の儒学・儒教	標準
	Ⅲ	近現代の女性	標準

＜出題傾向＞

例年同様、大問数が 3 題、小問数が 38 問という構成で、空所補充、正誤文判定問題、語句選択、年代整序、組合せなどといった形式の問題が出題されている。小問数 38 問というのは、大学入試問題として、ほぼ平均的な量と言えるだろう。ただし、正誤文判定問題では 2 行にわたる長めの選択肢も珍しくないため、時間配分には注意が必要である。

各大問における設問のタイプは、①語句選択問題・空所補充問題（史料読解を求める問題も含む）、②考察力を要する正誤文判定問題（年代整序問題も含む）に大別され、大問ごとの難易差はほとんどない。その多くが基礎・標準レベルと言ってよい問題群であるが、やや細かい知識を問う問題も一部には含まれている。2 月 7 日の問題Ⅰは、2 行からなる正誤文判定問題が多数を占め、教科書の脚注や地図に目を通しておかなければ対処しにくい設問で構成されていた。ただ、その一方で、同日の問題Ⅱ・問題Ⅲは「標準」とはいえ基礎に近いレベルであったため、全体をならしてみれば、日程ごとの難易差はほとんどないと言えるだろう。

近年では、共通テストと類似した形式の設問も見られるようになっている。具体的には、①史料・表の読解を求める設問（2 月 8 日の問題Ⅲ－問 12、2 月 9 日の問題Ⅰ－問 7(2)）、②地図・図を用いた設問（2 月 7 日の問題Ⅱ－問 11、2 月 8 日の問題Ⅲ－問 9、2 月 9 日の問題Ⅰ－問 10）が挙げられる。地図・図を用いていなくても、教科書に掲載されている地図を確認しておかないと対処できない、「すべて同じ道に属している国の組合せ」といった設問（2 月 7 日の問題Ⅰ－問 6）も出題されている点に、注意が必要だろう。

リード文には「古代の道」（2 月 7 日）、「大日本帝国憲法・日本国憲法と電子データ」（2 月 8 日）、「馬と日本史との関わり」（2 月 9 日）など、興味深いものが見られた。こうしたテーマは、受験生にとってそれほどなじみのあるものではないため、戸惑うこともあるかもしれない。しかし、どのようなテーマであっても、時代では原始から現代、分野では政治史・対外関係史・社会経済史・文化史の全てを対象とし、全時代・全分野をカバーしようとする出題姿勢がうかがえる問題となっており、小問の難易度や形式がリード文に左右されることはない。したがって、特定の時代・分野だけを集中的に学習しても効果は薄く、偏りのない学習をめざすべきである。

文化史や社会経済史には特に注意が必要である。たとえば、「古代・中世における文化の担い手と受け手」（2 月 8 日）では、多くが基本的な知識で対処できるものの、古代・中世のすべての時期の文化を漏れなく学習していなければ、高得点を望めない構成となっていた。

社会経済史からの出題では、「近現代の通貨体制」（2 月 7 日）が挙げられるが、過去にも「原始・古代の社会情勢や環境と生活様式」や「中・近世～近代の税制度と社会構造」をテーマとする出題が見られるため、過去問研究を充実させ、社会経済史に注目していた受験生は有利だったはずである。

対外関係史は、政治史とともに基本的な分野であるだけでなく、新たな教科として「歴史総合」が導入されたこともあって、今後ますます重要性を増すだろう。今年度の 3 日程では、対外関係史を正面から扱った出題は見られなかったが、過去に出題例のある「近現代の日本とアジア」などのテーマを想定しておく必要がある。世界のなかの日本といった視点をもっておくべきだろう。

＜学習対策＞

＜出題傾向＞でも述べたように、語句選択問題・空所補充問題と正誤文判定問題に大別される。

まず、語句選択問題・空所補充問題への対策についてだが、問題は基礎～標準レベルの問題がほとんどを占めているため、教科書の記述を理解していれば十分合格点を得ることができる。もちろん、語句選択や空所補充問題に対応するためには、教科書に掲載されている重要な語句を覚えていく必要があるが、単純な暗記だけでは意味がない。特に空所補充問題は、問題文の流れの中で語句を判断する必要があるため、教科書の本文を読み進めていくなかで覚えていくことが大事である。ただし、教科書をただ漫然と読むだけでは、そのときには理解ができ、語句も覚えたように思えても、それがしっかりと記憶に残っていないことが多い。教科書で学ぶ際は、たとえば荘園・金本位制など、やや難解なテーマに出会ったならば、常にそれらの内容や仕組みをノートにメモするなどして、定着させていくことが大切である。個々の事件や政策について、背景・結果などの因果関係をメモしたノートを作成するのもよいだろう。必要に応じてそのメモを参照しながら理解を深め、最終的にはメモを見なくても自分で説明ができるようになれば、入試問題に対応できるレベルでそのテーマが定着したと言えるだろう。このように、インプットした情報を常にアウトプットすることが大切である。

次に、正誤文判定問題についてだが、ここで確実に得点できるかどうかが合格へのカギとなるため、十分な対策が必要である。文章の正誤を判断する際には、どの時期や時代が問われているのか、どのような事象に関連する事柄が問われているのか、などといったことを正確に把握したうえで、選択肢となる文章の論理性や一つ一つの歴史用語の正誤を判断する必要がある。こうした訓練を行うには、比較的入手しやすい、共通テスト日本史 B や過去に出題されたセンター試験日本史 B の問題に取り組んでみるとよい。特に、2021 年度から導入された共通テスト日本史 B は、過去問はまだ少ないものの、類似した問題が多く見られるため、積極的に取り組むと大きな効果が期待できるだろう。

また、時事問題が反映された問題文も見られる。日本史という教科の性格上、現在おこっている出来事がそのまま出題されることは考えにくいが、ニュースで取り上げられるような諸問題は、

過去のどのような歴史的な出来事と関連しているのかといった意識を常にもっていてほしい。歴史に関係の深いニュースにアンテナをはっておくということも、日本史の学習においては大切なことである。

学習の最終的な仕上げとして、過去問演習に取り組むことも不可欠である。本番を意識しながら、時間制限を設けたうえで過去問演習を積み重ねていこう。そして間違えた箇所やよくわからなかった点については、もう一度教科書に戻って確認することが大事である。これらの作業を繰り返し実践することで、必ず合格点を得られる実力が身につくはずである。

以上